May 2024 vol.20

NIHON FUKUSHI UNIVERSITY

日本福祉大学

国際学部だより

News Letter Faculty of Global Studies 20

May 2024 vol.

〒477 - 0031　東海市大田町下浜田1071番地　日本福祉大学 国際学部

目　次

P1 「国際福祉開発学部」から「国際学部」へ
P2-3 卒業論文発表会特集
発表会の開催、優秀論文賞の紹介、運営者の声、発表者から一言
P3-4 学部イベント・ゼミ活動の紹介
P5 就活関連イベント
P6-7 ふくしAWARD２０２３の開催
P7-8 国際フィールドワークI (1年生)の様子
P8 ２年生からの学外での学び(フィールドワークの様子など)

本ニュースレターは、２０１３年の第1号発行以来、国際福祉開発学部のイベントやゼミ活動に加え、学生各自の多様な学びについてご紹介してきました。本号(第２０号)では、２０２３年9月から２０２４年5月までの取り組みの一端をご紹介したいと思います。また本号は「国際学部」という名称で発行する最初のニュースレターになります。そこで冒頭では、国際学部としての新たな門出を前に、これまでの国際福祉開発学部の歩みを振り返っています。

「国際福祉開発学部」から「国際学部」へ

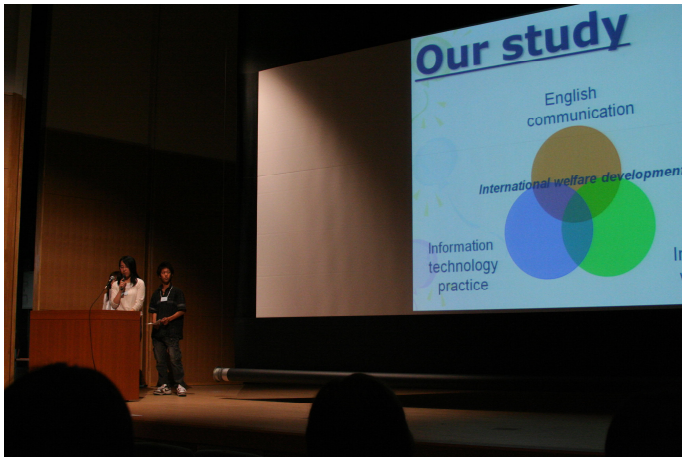
学部長 佐藤 慎一 教授

私たちの学部は、２０２４年４月から「国際学部」として新たな一歩を踏み出します。これまで国際福祉開発学部として学生と教職員が一体となって、多くの活動を実践してきました。海外での活動はもちろん、日本国内においても、国際的な感覚が必要となる場面は多く、現場と協力した取り組みから大きな学び・力を得てきました。

こうした多様な領域での取り組み実態を踏まえ、また、今後も広い領域で継続的に活動していくことを目指して学部名称を変更することにしました。名称変更を機に、今後、より魅力的で充実した学びの機会を提供していきます。学部での取り組みは、このニュースレターをはじめ、WebサイトやSNSで発信していますので、ご興味のある方はぜひチェックしてください。今後とも、皆さんのご支援とご協力をお願いいたします。

～２００８年度に行った学部の始めての様々 in pictures～

初めての新入生セミナー(２００８年４月)



初めての学部主催ワールドユースミーティング（２００８年8月）

美浜キャンパスでの授業

海外での
フィールドワーク

卒業論文発表会特集

2024年1月23日(火)、24日(水)の2日間にわたり、東海芸術劇場にて卒業論文発表会を開催しました。総勢54名が、4年間の学びの集大成である卒業論文を発表しました。

テーマは、国内外の地域づくり、SDGs、英語・日本語教育など、学部の中心的な学びの内容に直結するものから、動物の福祉、同性婚、仕事観といった学生自らが関心を寄せ取り組んだテーマなど多岐にわたりました。文献をもとに検討するだけでなく、インターンシップやフィールドワークの経験、インタビュー調査やアンケート調査を実施して、生の声やデータを集める工夫が随所に見られ、この点は、本学部の学びの特徴(自らが動きながら学び、学びながら動くこと)をよく反映しています。

また、発表後の質疑応答は非常に充実したものとなりました。教員からのコメント以上に学生からのコメントが多く投げかけられた印象です。学生同士で学び、高め合う様子はとても印象的でした。初めての論文、しかも2万5000字という文書作成に取り組み見事に完成させたこと、またその成果を東海芸術劇場という大きな会場でプレゼンテーションをやりきった経験は、必ずや社会人生活を送る上でも力となり、今後の人生を送る上で大きな自信になると確信しています。みなさん、本当によく頑張りました。

2023年度優秀論文の紹介

多くの素晴らしい卒業論文の中で、今年度は「優秀論文」として6本、その中から「最優秀論文賞」として1本が選出されました。

最優秀論文　閏間詩音梨　「「エモい」とは一体何か ―「エモい」ものの共通点から―」

優秀論文　内海彩音　「子どもたちの学ぶ場と居場所づくり～東海市学習支援事業みらいーなの活動を通して～」

優秀論文　山本彩加　「障害児・者のきょうだいが自分らしく生きていくために
ーきょうだいの人格形成、職業選択に関するヒアリング調査を通して」

優秀論文　近藤匠　「キャッシュレス決済に関する調査研究―地元の岡崎市を中心にー」

優秀論文　PHAM THI THUY TRANG　「日本で暮らしているベトナム人にとって難しい「学んだけれど、使えない」日本語の課題とは～文脈に適した語彙・表現を選ぶには～」

優秀論文　渡辺 乃里香　「笑顔がもたらす影響力 ～国籍による捉え方の違いに着目して～」

発表者の声

PHAM THI THUY TRANG(2020年度入学　ベトナム出身)

私の卒業論文のテーマは『日本で暮らしているベトナム人にとって難しい「学んだけれど、使えない」日本語の課題とは』です。自分自身の体験として、来日前に日本語をある程度学んできたにもかかわらず、来日して最初の頃、実際の会話にとても苦労したことから、「日本語学校で学んだのに会話ができないのはなぜなのか」を明らかにしたいと考えたからです。そこで、ベトナム人の留学生や技能実習生は、ベトナムでどのような日本語能力を身につけてきたのか、また、来日して1年の間に、日常会話でどのような場面で対応ができずに困ったのかについて事例研究を行いました。事例研究ではインタビューを行いましたが、対象者を選び、依頼するところから、結果をまとめるに至るまで、非常に時間が掛かりました。しかし、インタビューを通じて、事前に想定していなかった結果も得られたし、ベトナム人の日本語学習者の気持ちや学習動機などを深く理解できたことで、論文完成に向けて貴重な取材機会となりました。

また、卒業論文を書くにあたって、ウェブ研究と文献研究も行いました。日本語の文献がほとんどで、難しい言葉も多かったので、情報を検索して取捨選択する際とても大変でした。しかし、その作業が自分の勉強にもなりました。論文の完成を通じて、疑問を持っていたことに対する答えや課題が明らかになり、研究活動を通じて、自分が大きく成長したと感じることができました。

苦労して卒論を書いたことによって、社会に出てからも、自分のやりたいこと、深めたいこと、関心があることがあったらためらわず責任を持ってやる気を出してやっていきたいと考えています。後輩の皆さんを応援しています。頑張ってください!

近藤匠（２０２０年度入学　岡崎城西高校出身）

私の卒業研究のテーマは、「キャッシュレス決済に関する調査研究」となっております。キャッシュレス化が進む現代社会において、消費者の支払い行動や意識にどのような変化が起きているのかを知りたいと感じたからです。論文作成については地元３００店舗の実地調査を行いました。キャッシュレス決済の利用率や影響要因などについてを調べました。調査した店舗が膨大であったため、調査は予想以上に時間がかかりましたが大変貴重な経験になりました。

後輩の皆さんには、卒論作成にあたって、以下の3点を心掛けて頂きたいと思います。①これまでのゼミでの学習内容に沿っていること。②時間的な余裕を持てるために、4年生になったらすぐに卒論のテーマを決めること。③卒論発表会では台本を見ないで話す練習をすること。これは、発表力や自信がつき、聴衆の反応も良くなるからです。それでは、みなさんの健闘をお祈りしています。頑張ってください！

運営者の声

大畑 萌華（２０２１年度入学　豊川高校出身）、田辺 紫野（２０２１年度入学　福知山淑徳高校出身）

教職ゼミの学生は、卒論発表会の司会など運営の一部を担っています。昨年度は東海キャンパスの2会場とZoomを使用したハイブリッド開催で、私はタイムキーパーを務めました。そして、今年度は3年生として、東海市芸術劇場の会場で司会を務めました。司会は発表会の進行を任されます。2年生のタイムキーパーやマイクランナーと連携し、質疑応答を含めた時間調整を行うなど、スケジュールに沿った円滑な進行を目指しつつ、柔軟な対応をとることを心掛けました。学年間でコミュニケーションをとり、昨年度の経験やアイディアを共有し、補完的に役割分担を機能させることができました。緊張もありましたが、チームワークでカバーし、4年生の発表を支える運営に貢献できたと感じています。自分自身の卒論作成にも大きな刺激となる、すばらしい機会でした。

学部イベント・ゼミ活動の紹介

台湾・韓国と研究交流（佐藤ゼミ）

１２月には台湾・高雄でASEP（アジア学生交流プログラム）、1月には韓国・光州の全南大学で研究発表・交流会に学生たちが参加しました。

ASEPは、台湾の高雄市教育局主催で行われる国際交流イベントであり、アジア各国からの高校生・大学生が参加します。本学部主催で毎年８月に開催しているWYM（World Youth Meeting）と姉妹関係にあり、どちらも、複数国の学生で構成されるチームによる英語協働プレゼンテーションを核とするイベントです。コロナ禍のオンライン開催を経て、今回、3年ぶりの対面開催となり、これまでオンラインで協働調査・発表準備をしてきたメンバーと念願の対面となりました。

韓国の全南大学での研究交流会には中国の温州大学も参加し、また、オンラインでアメリカの南カリフォルニア大学も参加しました。各大学の取り組み・研究を英語で発表・意見交換しました。発表を終了し、緊張から解き放たれて行う交流も醍醐味の1つです。大学の歴史を紹介する少し真面目なキャンパスツアーから、POPカルチャーなど、若者同士のカジュアルな交流まで、楽しく充実した時間となりました。

JICA草の根事業・カンボジア教育開発（佐藤ゼミ・米津ゼミ）

学部では、独立行政法人国際協力機構（JICA）から草の根技術協力事業を受託し、カンボジアの教育開発プロジェクトを実施しています。カンボジアの教育は依然として多くの課題を抱えており、子どもたちによりよい教育を届けるため、各種の取り組みを行っています。

２０２４年２月には、３年生３人が現地小学校１０校を訪問して各種の活動を行ってきました。３人は昨年に引き続いての訪問で、カンボジアの子どもたちは覚えてくれており、昨年以上に充実した活動となりました。

子どもたちが積極的に参加する授業スタイルを目指し、現地教員に協力してグループワークのサポートなどを行いました。

カンボジアでは算数が苦手な子が多いと言われています。楽しく算数に取り組めるよう、ランダムに数字が入れ替わるアプリを利用して、クイズ風に行う足し算・引き算を行う授業を準備・披露しました。

カンボジアでは小学４年生から英語を学びます。学びたての英語を一生懸命に使い、何とか学生たちとコミュニケーションしようとする姿が印象的でした。

半田市多文化共生推進地域交流事業を企画、実施（カースティゼミ）

半田市の「多文化共生推進計画」の実施項目の一つとして、学生が２年前から「地域交流事業」にとりくんできました。２０２３年度には夏と冬に1回ずつ、半田市にある生涯学習施設を使って季節に合わせたイベントを実施しました。夏のイベントでは子ども達と一緒に留学生がネパールのダンスを教えて、ミャンマーのお菓子や中国の紙の工作に取り組みました。１２月には、リサイクルのペットボトルで大きなクリスマスツリーを参加者全員で作りました。多様なルーツを持つ半田市民同士が一緒に取り組むことによって仲良くなり、地域の多文化共生を少しずつ実現することを目的としています。

ネパールのダンスと中国の工作（７月）

リサイクルペットボトルのクリスマスツリーと植木鉢（12月）

就活関連イベント

学部独自の就職活動支援イベント「アクティブラーニングと就活」(9月27日)

今年度初めての取り組みとして、「就活に活かせるアクティブラーニングとは（学生という価値を活かす）」（2年生を対象）と「アクティブラーニングを有効に就活に活かせる（学び・経験・行動を成長に繋げる）」（3年生を対象）という二つのワークショップを開催しました。留学生や大学生のインターンシップや就職支援を多く手がけているMan To Man株式会社の社員でもあり、本学部の卒業生でもある林さんがワークショップのファシリテーションをし、「国際の学生ならではの」就職活動の考え方についてさまざまな提案やアドバイスを提供してくれました。学生の反応は大変良くて、振り返りのコメントとして「企業に求められる存在について理解を深めることができ、今日でより1歩、成長の鍵を手に入れてたと思ってるので、今回の発表を聞いたことを将来の自分に活かせれるように考えて動くことを意識してがんばっていきたいです」などポジティブなものが非常に多かったです。

Man To Man の林さん(国際学部の卒業生)が東海キャンパスでワークショップを実施

学部独自の就職活動支援イベント「先輩たちの経験談」(11月15日)

こちらも今年度初めての学部独自イベントで、卒業後の次のステップが決まった4年生5名が後輩に対して自らの就職活動の経験について語ってくれました。4年生はそれぞれ大学院の進学、協同組合（留学生）、市役所、JICAの青年協力隊や信用金庫への内定を獲得し「内定までの道のりと心得」について報告を行いました。学生から寄せられたコメントからは「自分のやりたいこと、楽しいと思うことや自分のことを見つめ直すことも意外といちばん大事なことなんだと気付かされて今後の就活に役立てていきたいと思いました。体験談が具体的にあってとても印象に残りました。勉強をしておくことと、自分を見つめ直す期間をこれから作ろうと思いました。しんどくなった時もポジティブに考えて、自信を持って生きていきたいと思いました。」など、このイベントがとても刺激的だったことが伺えました。

後輩たちに対して自分たちの経験談を語る

ふくしAWARD２０２３の開催

学内プレゼンテーションコンテスト「ふくしAWARD２０２３」が２０２４年1月２２日(月)に開催されました。本コンテストは、「地域に根差し、世界を目指す『ふくし』の学びを伝えよう！」をテーマに２０１５年度から開催されています。第9回にあたる今大会では、英語部門3賞を全て本学部の学生が受賞しました。また司会者としても本学部の学生が活躍しました。

英語部門

・大賞および学長特別賞(＊) TANGNAMI MAGAR MOHANさん (国際福祉開発学部 3年・個人)
「Navigating Education Challenges: Understanding the Impact of Nepalese Migration on Children in Japan」
＊一次審査を通過し、当日発表が行われる作品の中から学長が選んだ1作品に贈られる賞

英語部門

・準大賞　杉本光咲さん (国際福祉開発学部 3年・個人)
「Responsible Engagement in Educational Development in Cambodia」

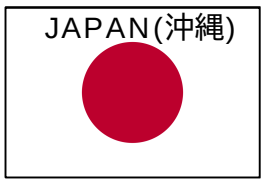
・奨励賞　GHIMIRE AARJUさん (国際学部1年・グループ)
「Stop wasting food」

大賞を受賞した3年生のTANGNAMI MAGAR MOHANさん

国際フィールドワークI (1年生)の様子

国際学部では、1年目から海外や日本でフィールドワークを行うプログラムが用意されています。それが演習科目「国際フィールドワークI」です。時期は2月、約2週間にわたるプログラムです。学生生活の比較的早い時期にフィールド体験をもつことで、自分のやりたいことや関心を早い段階で見つけ、大学生活を充実したものにしてもらいたいという学部開設以来のこだわりが詰まっています。2023年度はフィリピン、カンボジア、沖縄のプログラムを実施しました。

International Fieldwork



2年生からの学外での学び(フィールドワークの様子など)

2年生からは、学生自身がフィールドワークを企画します。自ら企画書を書き、フィールドワークを実施し、それを報告書にまとめることで「国際フィールドワークII～」の単位に申請することもできます。今年度もたくさんの学生が国内外のフィールドで、たくさんのことを学んでいます。紙面の都合で全てを紹介できないのが残念です。元気いっぱいに楽しみ、学ぶ様子をご覧ください！

国際福祉開発学部 2年 伊藤凌雅(2022年度入学 NHK学園高校出身)

私は2年時のアクティブラーニング期間にフィリピンに1ヶ月間行きました。最初の2週間はダバオのミンダナオ国際大学で英語の勉強をし、残りの2週間は児童養護施設のハウスオブジョイで様々な体験をしました。ミンダナオ国際大学では、「英語教育における日本とフィリピンの違いから考える英語教育の形」をテーマにフィールドワークを実施しました。ハウスオブジョイでは都市部でない場所での生活や児童養護施設の雰囲気を感じ、異文化体験をすることができました。初めて1人での海外で緊張していましたが、度胸を持って沢山の人に話しかけ、有意義な時間を過ごすことができました。

編集後記

今号のニュースレターは、2023 年度後半期の取り組みを中心に紹介しました。今回取り上げたアクティブラーニング期間の学生自身の様々な活動、国際フィールドワーク、卒業論文発表会だけでなく、SDGs AICHI EXPO2023 など今回紹介できなかったイベントもたくさんあります。国際福祉開発学部は、多文化・多言語環境で国籍を超えて、学生同士が学び合える場所です。その雰囲気を少しでも感じていただけると嬉しいです。(担当:砂原美佳)

発行人：日本福祉大学 国際学部
〒477－0031 東海市大田町下浜田1071番地
TEL. 0562-39-3811 FAX. 0562-39-3281
編集人：国際学部 学部長 佐藤 慎一
問合先：東海事務室 国際学部担当（kokusai@ml.n-fukushi.ac.jp）

インスタグラム
@NFU_KOKUSAI

フェイスブック

学部教員紹介